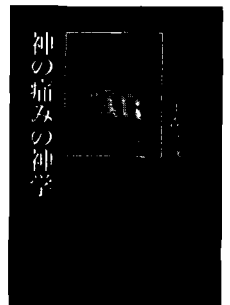


戦後日本が生み出した神学の名著
北森嘉蔵著

神の痛みの神学



森本あんり

書評の依頼を受けたのは、おそらく本書英訳版の再版に付されたわたしの「序文」のゆえであろう（Wipf & Stock Publishers, 2005）。わたしもそのことを思い返しつづお引き受けした。しかし、今般手にした新版には、倉松功氏と高柳俊一氏が本書の意義と研究史を辿ったいいねいな「解説」と、著者が弱冠二十二歳で執筆した幻の原論文が収められており、再版英訳書よりもずっと内容豊かなものとなっている。特にこの日本ルーテル神学専門学校卒業論文は、本書の基本構想を胚胎したものとしてみれば知られていながら、これまで未公開であった。著者は没する前年に、その手書き原稿を東京神学大学に寄贈している。この一事からしても、京都大学入学前に執筆されたこの論文が本人にとって少なからぬ意義をもっていたことが知られよう。

原論文以来一貫している北森神学の中心思想は、キリストにおいて神を見ること、すなわち「キリストにおいてわたしに恵み深くある神」を知ることである。この神こそ、十字架において

る痛みの愛において「包み難きを包み、許し難きを許す」三位一体の神である。本書は、そのパウロ的・ルター的な論理を緻密に展開したものである。

原論文は、本書がどのような資料をもとに書き進められたかを垣間見せてくれる。一九三七年のことであるから、バルトの『教義学』はまだ最初の巻しか参照されていない。他に、ハルナックやレーヴェニヒ、ヘルマンやリッツェル、アルトハウスやニグレンなど、その後東京神学大学で先生の講筵に列した者にはなつかしい名前が並ぶ。だが、驚くべきはこうした資料の用いられ方である。二十二歳の著者は、それらに学びつつ自らの神学を形成したのではない。すでに揺るぎなく自らのうちに確立した神学をもって、それらを縦横無尽に論断しているのである。デニーやラシドールの贖罪論も一刀両断である。著者は、いわば名の通った神学者たちの山々を身軽に渡り歩いてみせるアルピニストであるよりは、自ら手にした羅針盤だけを頼りに、次々と迫り来る氷山をかわしながら目的の港へと航路

を切り開く船長のごとくである。では、その彼の羅針盤は、いったいいつどのようにして作られたのであろうか。

本書には戦時中の日本やアジアの民衆の苦難への共感がない、という人もあったが、それは浅薄な批判である。宗教改革的な義認論やカトリック聖化論の理解も、今日の眼で見ればやや一面的なところがある。だが、ここではもう少し別の視点から、本書を読む者に問いかけをしておこう。

数年前にアメリカで本書を授業に取り上げた時、いちばん苦勞したのは『幸子屋』などのストーリーを学生たちにどう理解してもらおうかであった。著者は、シェイクスピアの悲劇には「苦しさ」や「悲しさ」はあっても「つらさ」はない、というこの「つらさ」が北森神学の核心を形成しているのだが、昨今では日本人ですら義太夫や浄瑠璃の義理人情には疎い。「女房喜べ、倅は御役に立ったぞ」という松王丸の台詞に、いったいどのくらいの人が「滂沱の涙」を流すであろうか。「堪へ難き

ヲ堪へ忍ど難キヲ忍ど」という玉音放送の後に生まれた世代にとり、「他者を愛して生かすために、自己や自己の愛する子を苦しめ死なしめる」という論理は、フェミニニスト神学者たちが批判する通り、むしろ虐待や家庭内暴力のジャンルに聞こえてしまうのである。さて、本書はそれらにどう答えるであろうか。本論でも繰り返されているが、二十二歳の北森は、「神の痛み」がけつして固定した永久的な意義をもってはならない、と断言している。これもまた「光そのものにあらずして、光に託して証しするもの」なのである。そして、まさにその言葉が必要でなくなった時こそ、その言葉が指し示す事柄自体が成就する時である。神学はこの時を望み見る旅人の業にすぎない。

（もりもと・あんり 国際基督教大学教授）
（A5判・三五六頁・定価三三〇円（税込）・教文館）

みんなの聖書 絵本シリーズ



第13巻「ノアのはこぶね」画・藤本四郎



2年目も、子どもに伝えたい
聖書のお話が、いっぱいです。

第13巻(2009年4月発行分)から
第24巻(2010年3月発行分)まで
1,000円×12ヶ月=12,000円
↓
9,800円(税込)

全36冊発行
30ページオールカラー
定価1,000円(税込)

発刊スケジュールなど詳しくは
WEBページをご覧ください
<http://www.bible.or.jp>

お求めはお近くの
キリスト教書店まで

町田法人
JBS 日本聖書協会
〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 聖書ビル
TEL 03-3567-1987 FAX 03-3567-4451
<http://www.bible.or.jp>